

横浜市インフルエンザ流行情報 10号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

《トピックス》

【警報発令中】 さらに報告数が増加しています。

【概況】

横浜市全体の第4週(1月22日～28日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、**64.59**となり、警報発令となった第3週の56.09よりもさらに増加しています。

年齢別では、15歳未満の報告が全体の約7割以上を占めています。また、学級閉鎖等の報告は、第4週では小学校を中心に219件、患者数4,889人となり、急増した第3週をさらに上回っています。保育園での集団発生の報告も増えており、お子さんがいるご家庭での感染予防が重要です。

また、病院や高齢者施設等での集団発生の報告も続いています。各施設での持ち込み防止や感染拡大防止対策を徹底しましょう。

迅速診断キットの結果は、第4週では **A型 25.1%**、**B型 74.8%**と、さらにB型の割合が増えています。例年と比べてB型の流行が早いため、一度B型にかかったことがある人がA型にも感染したり、A型とB型に同時にかかる可能性もあり、注意が必要です^{※2}。

インフルエンザの本格的な流行期に入ったため、正しい手洗い^{※3}等の予防、咳が出る時のマスクの着用及び早期受診などの対策^{※4}が重要です。

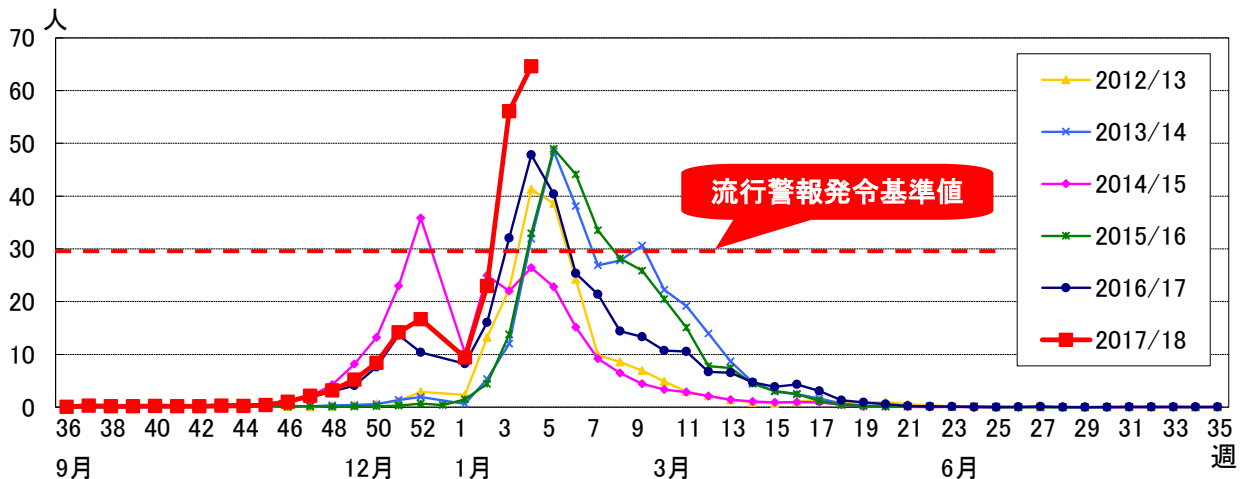
※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 2017/18シーズンの山形系統のB型インフルエンザ流行状況—横浜市(新着情報)

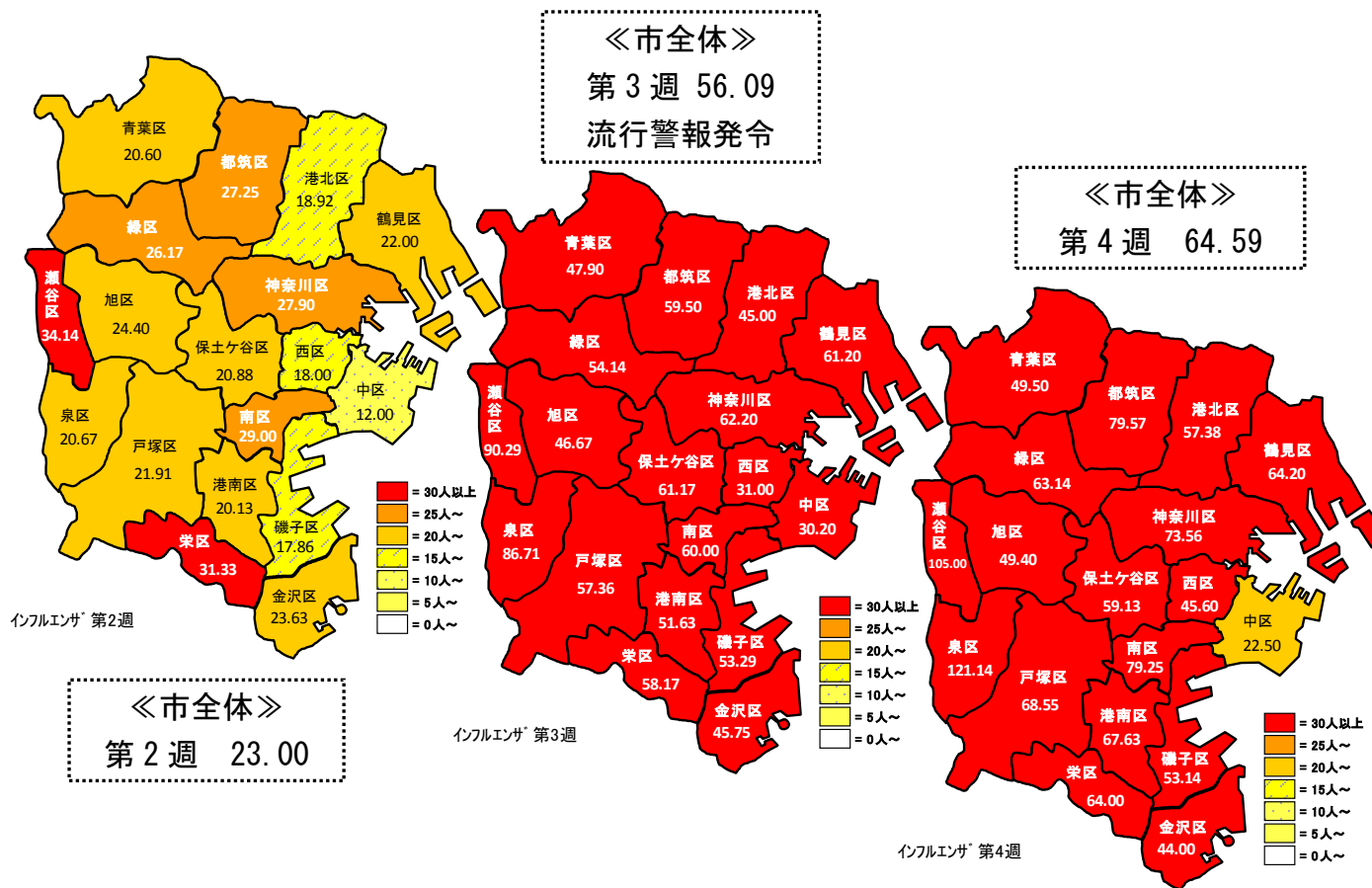
※3 横浜市保健所ホームページ(「正しい手洗い方法」および、掲示用ポスター「石けんで『手』を洗おう」をトップページに掲載しておりますので、是非ご利用ください)

※4 市民向けインフルエンザ予防チラシ(横浜市)

- 1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は、第4週(1月22日～28日)で、64.59となりました。流行警報発令基準値(30.00)を上回った第3週の56.09よりもさらに増加しており、1999年4月の現行の調査開始以来、最も多い報告数となっています。



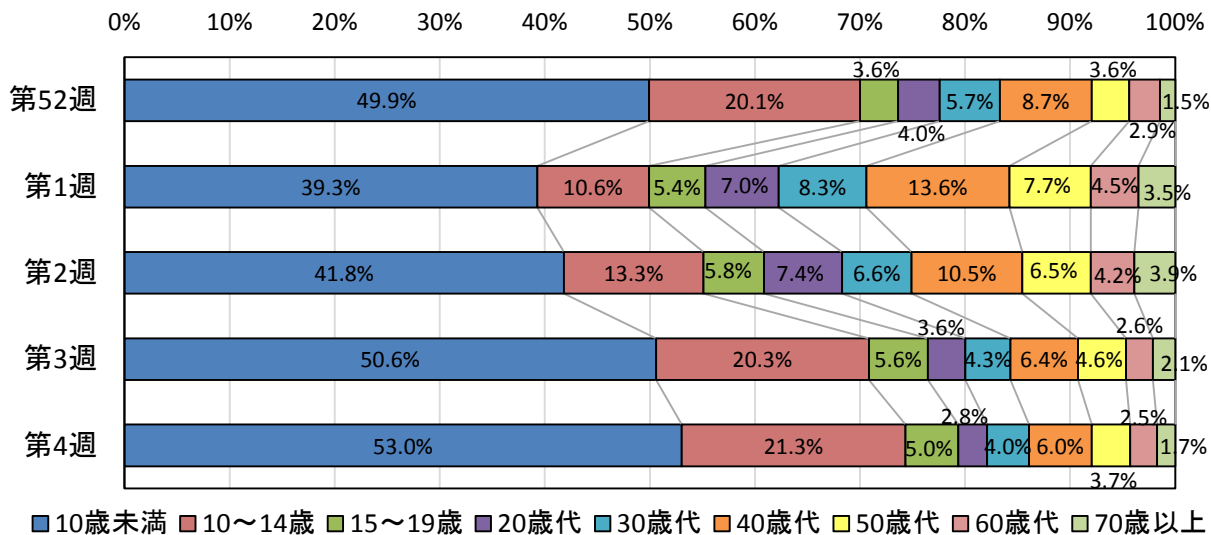
2 地図で表した直近3週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)



第3週にて、市内全体で定点あたり30.00を超えたため、流行警報が発令されています。流行警報は、警報継続基準値(10.00)を下回るまで続きます。
 昨シーズンは第3週に定点あたり32.23にて流行警報が発令され、第12週(2017年3月20日~26日)に解除されています。

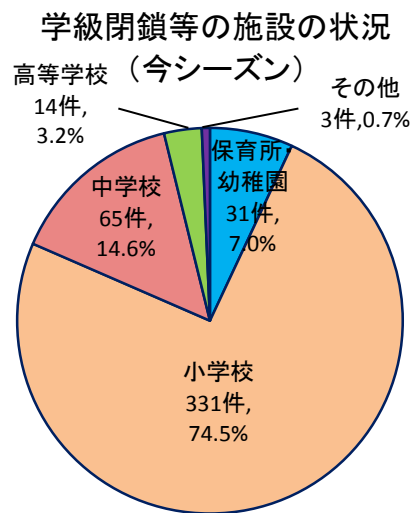
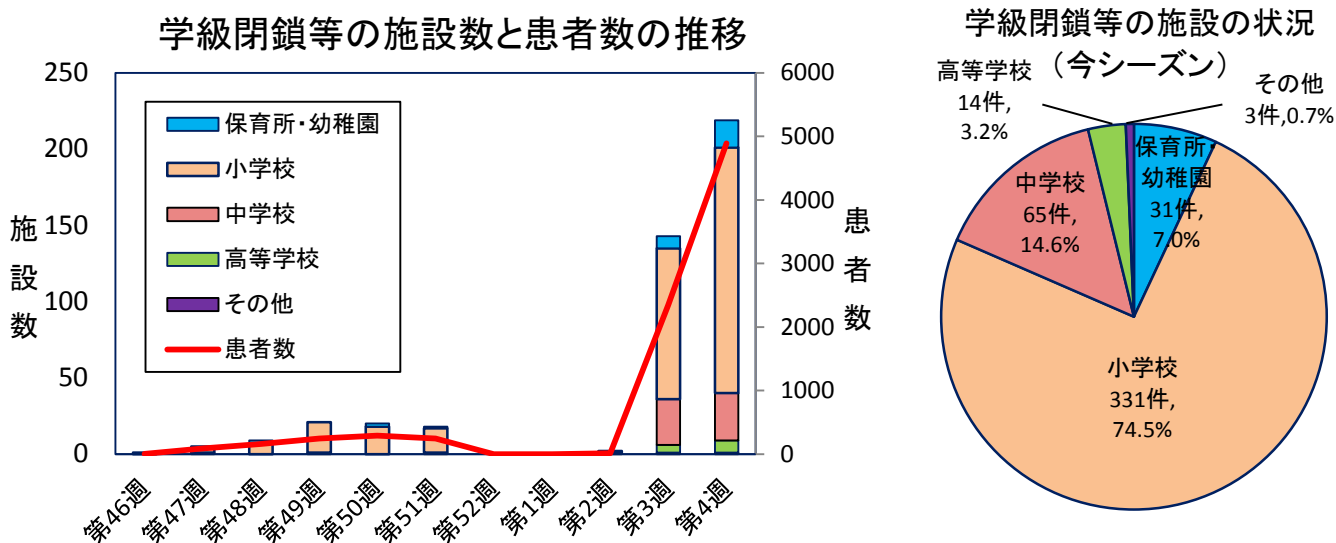
3 年齢層別集計:第4週の患者年齢構成は、10歳未満が全体の53.0%、10歳以上15歳未満が全体の21.3%を占めており、15歳未満が全体の74.3%を占めています。また、60歳以上は全体の4.3%となっています。

年齢層別患者割合



4 市内学級閉鎖等状況:学級閉鎖等の報告が急増した第3週をさらに上回り、第4週は219件(休校1件、学年閉鎖46件、学級閉鎖172件)、患者数4,889人の報告がありました。内訳は、保育所・幼稚園18件、小学校161件、中学校31件、高等学校8件、その他1件です。

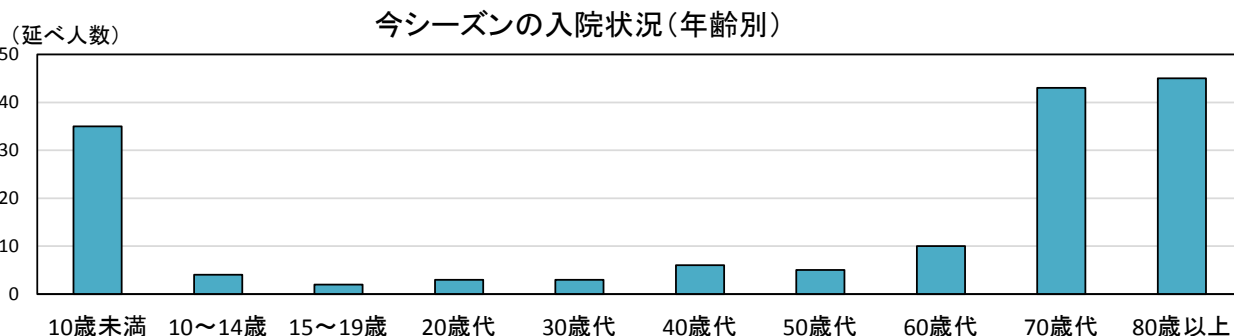
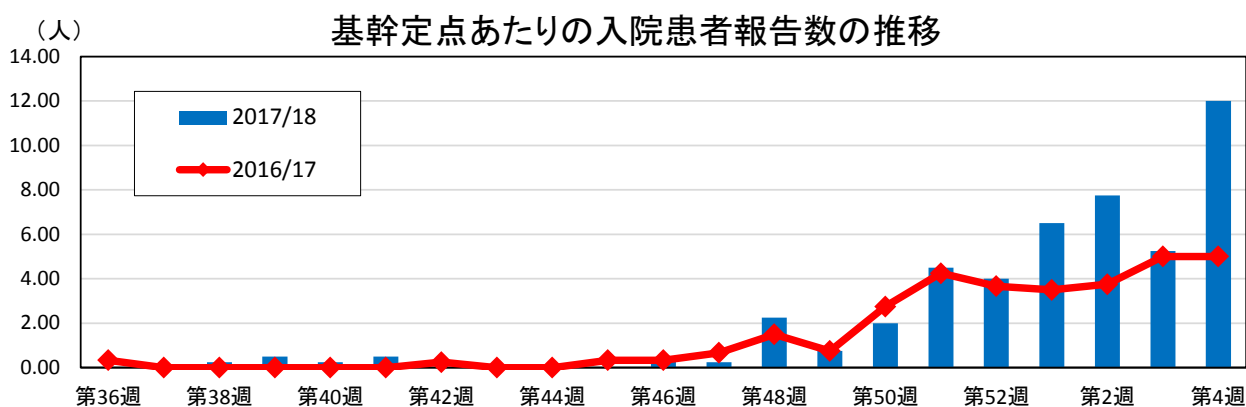
今シーズンの第4週までの報告は累計444件、患者数は延べ8,362人で、施設の割合は、保育所・幼稚園7.0%、小学校74.5%、中学校14.6%、高等学校3.2%、その他0.7%となっています。



5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※5}におけるインフルエンザ入院患者は、第4週は24人の報告があり、累計156人となりました。うち、15歳未満が39人、60歳以上が98人となっており、小児と高齢者の報告が多くなっています。

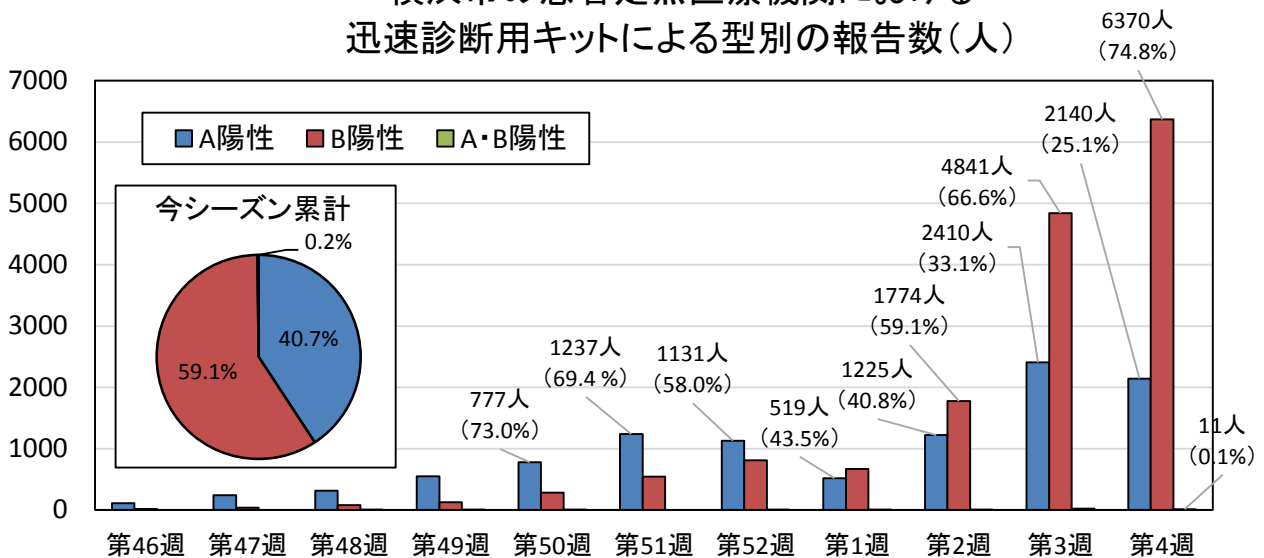
入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査等が実施された重症肺炎やインフルエンザ脳症が疑われる入院患者は、第4週では4人の報告がありました。

※5 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。



6 迅速キット結果:今シーズンの初めは A 型が多く報告されてきましたが、第 50 週頃より B 型の割合が増え始め、第 1 週で逆転しています。第 4 週の迅速キットの結果では、A 型 25.1%、B 型 74.8%、A・B 型ともに陽性 0.1%と、B 型の割合がさらに増加しています。今シーズン累計は、A 型 40.7%、B 型 59.1%、A・B 型ともに陽性 0.2%となっています。

横浜市の患者定点医療機関における
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



7 市内病原体検出状況:市内では病原体定点^{※6}から AH1pdm(40 株)、AH3(25 株)、B(山形系統)(56 株)が分離・検出されており、主に AH1pdm と B(山形系統)が分離・検出されている状況です。B 型ウイルスの流行が早期に始まっていることから、A 型ウイルスとの再感染や重複感染にも注意が必要です^{※2}。

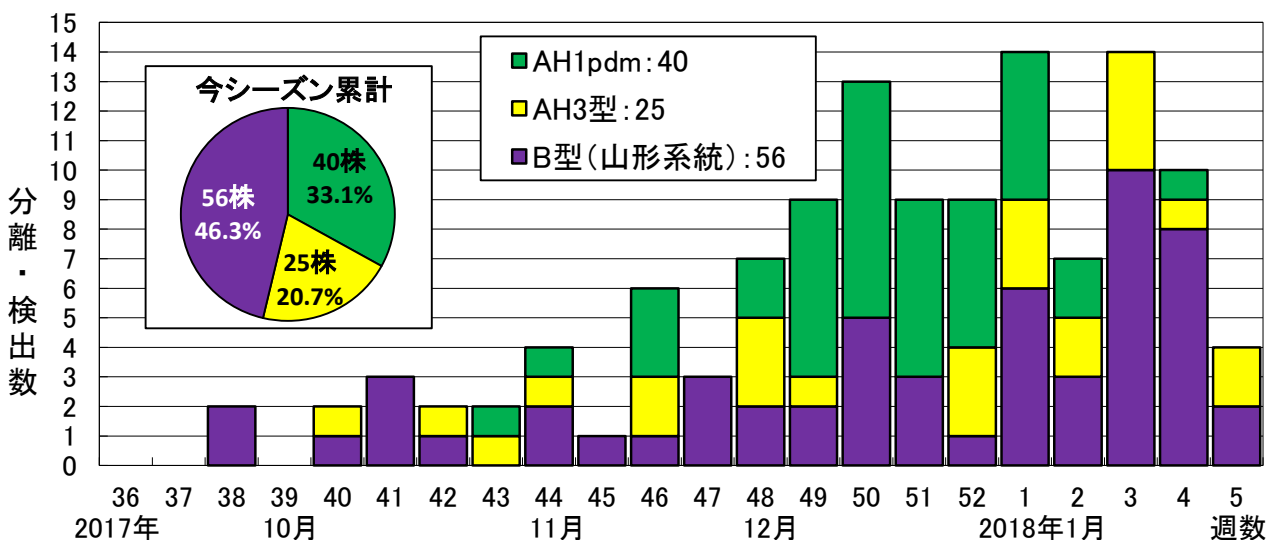
全国でも、主に AH1pdm と B(山形系統)が分離・検出されています^{※7}。

※6 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に 17 か所あります。うち、インフルエンザについては 12 か所にて採取されています。

※7 [週別インフルエンザウイルス分離・検出報告数\(国立感染症研究所、2018 年 1 月 26 日作成\)](#)

市内病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況

(2018 年 1 月 30 日現在)



8 分離株の抗原性解析:市内で分離された株(細胞培養した 174 株、1 月 31 日現在)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)を実施しました。ワクチン類似とされているのは 4 倍以内です。あくまでもウサギの血清を使っているため参考値ですが、AH3 は、18 株のうち 16 株が 8 倍以上で、AH1pdm(90 株)と B 山形系統(66 株)は、すべて 4 倍以内となっています。これは、AH3 の 94%が 8 倍以上で、AH1pdm および B 山形系統のすべてが 4 倍以下であったという国立感染症研究所の結果^{※8}と矛盾しないと考えられます。

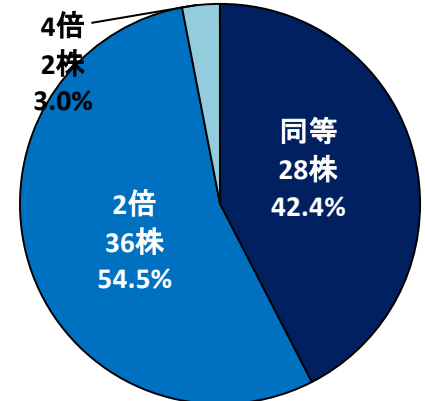
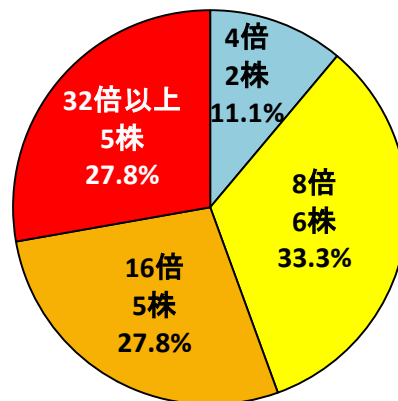
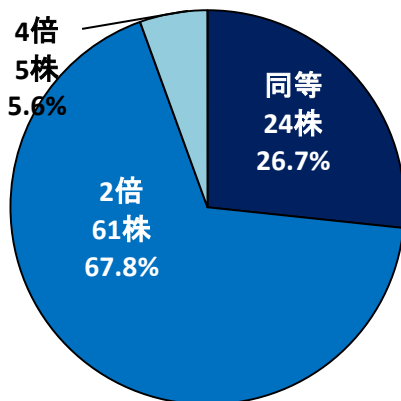
※8 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2018 年 1 月 29 日\(国立感染症研究所\)](#)

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析

AH1pdm 抗原性解析(90 株)

AH3 抗原性解析(18 株)

B 山形系統抗原性解析(66 株)



■ 同等 ■ 2倍 ■ 4倍 ■ 8倍 ■ 16倍 ■ 32倍以上

インフルエンザウイルス(AH3 型)
の電子顕微鏡写真(3 万倍)

撮影:
横浜市衛生研究所



※参考リンク 近隣自治体の流行状況 ○[神奈川県](#) ○[川崎市](#) ○[東京都](#)
全国の流行状況 ○[国立感染症研究所](#)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237
横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045(671)2445